不登校予防へのアプローチ

― 個別支援シートを用いた連携を通して ―

高知市立神田小学校　教諭　　岳本　由美

不登校の予防を目的とし、多忙な学校の諸事情に対応できるチーム支援の一方法を試みた。個別支援シートを作成し、活用する上で、そのシートを用いた支援会議を行った。それを実施、継続することで、チーム支援に、より効果が生まれることが分かった。校内でのチームのかかわりによって、児童に変容が見られるとともにチーム支援の理解が深まり、意識の高まりが感じられた。

その成果をふまえて、個別支援シートを有効利用し支援会議が継続できるように、学校における予防的なかかわりの一例として「校内におけるチーム支援の流れ」を提案した。

キーワード：不登校予防　チーム支援　個別支援シート　支援会議

1　はじめに

平成 17 年度の文部科学省「生徒指導上の諸問題に関する調査」において、高知県の不登校（30 日以上欠席）児童生徒数は小学校で 207 人（高知県の小学校全児童数に占める不登校児童の割合は 0.48%）と昨年度より微増し、依然として全国的に高い割合を示している。また、不登校児童数は学年があがるにつれて多くなっている。

学校の不登校への対応は、教職員の共通理解の段階から具体的なチーム支援の段階になり、登校刺激や家庭訪問など適切な支援が行われる学校が増えてきている。チーム支援とは、学級担任を含めて養護教諭や児童支援担当など複数の教職員がチームを組み、児童の学校での様子や家庭環境などを情報交換しながら、支援する方針や方法を検討し、連携して対応することである。チーム支援の有効性は理解しつつも、学級担任は教材研究をはじめ、学校行事への取組等様々な用務に追われ、話合いの時間を確保するのも困難な状況がある。そこで、多忙な学校の諸事情を考慮した校内の連携のあり方を探ることとした。予防的な観点からの取組が重要視されるようになり、不登校を未然に防ぐために、学校で苦戦している児童に焦点を当て、校内のチーム支援に取り組んだ。

2　研究目的

学校には長期欠席、いじめ、非行など問題状況により、個別に支援が必要な児童生徒がいる。支援の必要性が高い児童生徒にはチーム支援が有効であり、校内の連携が必要である。そのため、不登校等の早期発見・早期対応への取組の一方法として個別支援シートを用いて対応することで、校内の連携を図り、不登校の予防につなげたい。

3　研究内容

(1)　基礎研究（先行研究の分析及び文献研究）

以下の基礎研究の上に立って、学校において予防的な取組が重要であると考えた。

①　熊谷市での不登校半減計画への取組

熊谷市教育委員会は、「組織化」「かかわる」「意識化」の３点を重視し、３年間の計画で不登校の改善に取り組んでいる。「組織化」とは校内で組織を作り、そこで事例に応じたチームを組むことである。月３日以上の欠席の把握をし、登校している早い段階に対応することで不登校を未然に予防している。また、個別支援票に自由記述の欄を設けることにより、一人一人の子どもをめぐり話し合う機会が増え、学校関係者同士がかかわるチームを作りやすくし、児童生徒の存在と

チームでのかかわりが意識化されている。これらの取組によって不登校半減計画が成功している。

② 学級集団を支えるチーム支援

昨年度の心の教育センター研究生の研究によると、学級の人間関係づくりにＴＴで取り組むことにより、児童の自他理解の深まりや、コミュニケーション力の向上の効果を生んでいるということが報告されている。しかし、個別に支援の必要な児童に対しては、計画された仲間づくりの授業だけでは十分ではなかったことや、チームでのかかわりが意識化されるように工夫された個別支援票と併せて校内チーム支援の必要性が述べられている。

③ ３段階の心理教育的援助サービス

石隈利紀は著書『学校心理学』の中で、児童生徒の援助ニーズの大きさに主な焦点をあて、３段階の援助サービスについて説明している。一次的援助サービスは全ての子どもを対象とし、学校生活を通して対人関係スキルや学習スキル、問題対処スキルなどの促進的援助を行う。二次的援助サービスは援助ニーズの大きい一部の子どもの問題状況に対して行われる予防的サービスであり、子どもの問題が大きくなって子どもの成長を妨げないようにすることを目的とする。三次的援助サービスは重大な援助ニーズを持つ「特定の子ども」が自分の持つ強さや周りの援助資源を活用しながら、自分の発達上及び教育上の課題に取り組み、さまざまな問題に対処しながら学校生活を送れるように援助することである。本研究は石隈利紀の述べる３段階の援助サービスの中では二次的援助サービスにあたると考える。

(2) 実態調査

① 月３日以上欠席した児童の把握

本研究の対象は在籍校の５、６年生とした。その理由は、全国的に、小学校においては高学年になるにつれて不登校児童数が増えているデータが挙がっており、在籍校においてもその傾向が見られていることなどである。対象学年の平成 18 年４月、５月にそれぞれ３日以上欠席があった児童を挙げると、５年生は 10 名、６年生は５名だった。

② 昨年度長期欠席（年間 30 日以上）した児童の把握

平成 17 年度、長期欠席した対象学年の児童は５名だった。欠席の主な理由としては、病気、けが、スポーツによる遠征などがある。

③ 楽しい学校生活を送るためのアンケートＱ-Ｕの実施、分析

Ｑ-Ｕは学校･学級生活への不適応、不登校やいじめ被害の可能性が高いと見られる児童を早期に発見できる尺度を持ったアンケートである。学級生活不満足群にプロットされている児童は、不適応になっている可能性が高く、学級の中で自分の居場所を見出せず、不登校になる心配があると考えられる。個別の対応が必要である児童を発見するためにＱ-Ｕを実施、分析をした。

図１はＡ児のＱ-Ｕのプロットの位置を表したものである。Ａ児は、６月に実施したＱ-Ｕでは、学級生活不満足群にプロットされており､生活面で気がかりな点が見られた。そこで、個別の対応が必要と考え、個別支援シートを用いて対応していくこととした。対応を継続し、11 月には学級生活満足群にプロットが変化した。後に個別支援シートに見られる児童の変容を掲載する。

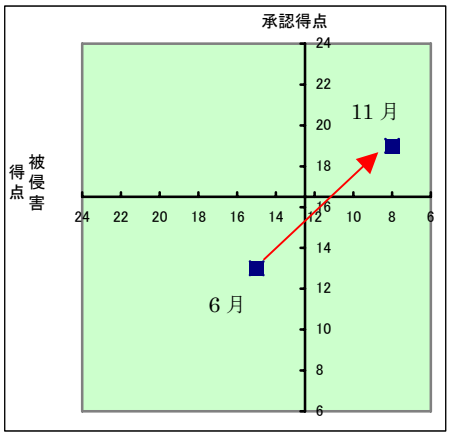


図１　Ａ児Ｑ-Ｕプロットの変化

④ 保健室に来室する児童の様子

保健室へ来室する児童が必ずしも不登校の心配があるわけではない。しかし、養護教諭の話によると、気になるのは、けがの手当てをしたり、熱を測ったりした後、何となくすっきりしない

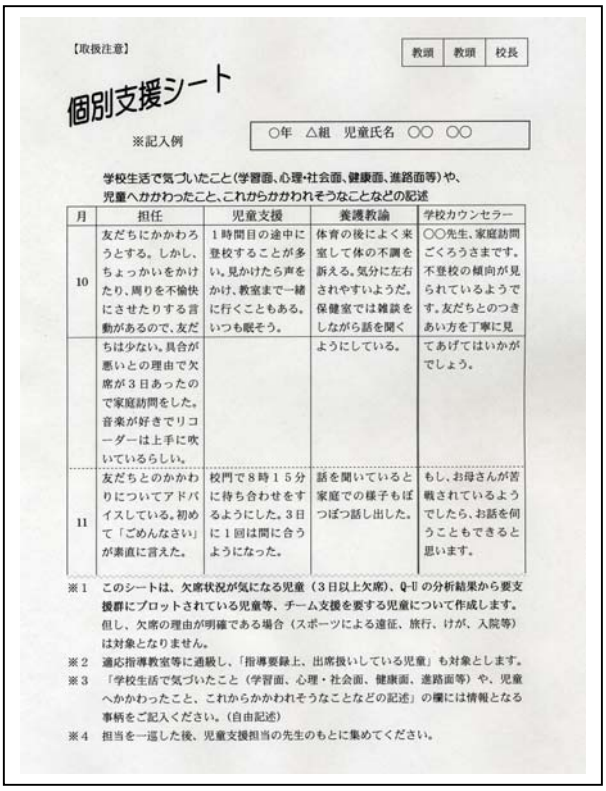
様子が見られる児童である。不安を抱えていたり、気持ちが混乱していたりと心が落ち着かない様子を何らかのサインとして見取る。そのような児童には、その後、校内で顔を合わせたときにも、気にかけて声をかける、担任に連絡するなどの対応をしている。

(3)　実践研究

①　個別支援シートの作成

連携とは､｢同じ目的を持つ者が互いに連絡をとり、協力し合って物事を行うこと。｣(広辞苑)である。学校におけるチーム支援では、児童の支援に対して、情報が共有され、支援の方向性を決定する中で、役割の分担が適切に行われ、行動化につながることになろう。個別支援シート（図２）の主な目的は情報の共有である。シートを回覧し、それぞれの担当が児童の学校生活のあらゆる場面で気づいたことや、現時点での児童へのかかわり、今後、この児童にどうかかわれるかなどをコメントしていく形にした。記入例は、友だちとのかかわりに苦戦している上、欠席、遅刻も目立ってきた児童のケースである。まず、担任が児童の様子を記入する。次に、児童支援担当にシートが回覧される。児童支援担当は、担任の記述を読んだ上で、児童へのかかわりや､その時の児童の様子を記入する。次に養護教諭にシートが回覧され、担任、児童支援の記述を読んだ上で、保健室での児童の様子などが記入される。さらに学校カウンセラーにもシートが回覧され、学校カウンセラーからの視点でコメントが書かれる。そして、管理職にも回覧され児童の様子を知っていただけるようにした。

また、本研究では児童の背景を客観的に把握できるように、個別支援シートに挙げる児童については、担任より聞き取りをし、個別支援票（図３）を添付した。



【取扱注意】

教頭	教頭	校長

個別支援シート

※記入例

○年　△組　児童氏名　○○　○○

学校生活で気づいたこと(学習面、心理･社会面、健康面、進路面等)や、
児童へかかわったこと、これからかかわれそうなことなどの記述

月	担任	児童支援	養護教諭	学校カウンセラー
10	友だちにかかわろうとする。しかし、ちょっかいをかけたり、周りを不愉快にさせたりする言動があるので、友だちは少ない。具合が悪いとの理由で欠席が３日あったので家庭訪問をした。音楽が好きでリコーダーは上手に吹いているらしい。	１時間目の途中に登校することが多い。見かけたら声をかけ、教室まで一緒に行くこともある。いつも眠そう。	体育の後によく来室して体の不調を訴える。気分に左右されやすいようだ。保健室では雑談をしながら話を聞くようにしている。	○○先生、家庭訪問ごくろうさまです。不登校の傾向が見られているようです。友だちとのつきあい方を丁寧に見てあげてはいかがでしょう。
11	友だちとのかかわりについてアドバイスしている。初めて「ごめんなさい」が素直に言えた。	校門で８時１５分に待ち合わせをするようにした。３日に１回は間に合うようになった。	話を聞いていると家庭での様子もぽつぽつ話し出した。	もし、お母さんが苦戦されているようでしたら、お話を伺うこともできると思います。

※１　このシートは、欠席状況が気になる児童（３日以上欠席）、Q-U の分析結果から要支援群にプロットされている児童等、チーム支援を要する児童について作成します。但し、欠席の理由が明確である場合（スポーツによる遠征、旅行、けが、入院等）は対象となりません。
※２　適応指導教室等に通級し、「指導要録上、出席扱いしている児童」も対象とします。
※３　「学校生活で気づいたこと（学習面、心理・社会面、健康面、進路面等）や、児童へかかわったこと、これからかかわれそうなことなどの記述」の欄には情報となる事柄をご記入ください。（自由記述）
※４　担当を一巡した後、児童支援担当の先生のもとに集めてください。

図２　　個別支援シート（記入例）

【取扱注意】　個別支援票　※記入例　（ 10 ）月

個票	○年	△組	氏名		性別		担任氏名	
当月欠席日数	5日	4月からの累積欠席日数	17日	昨年度欠席日数	17日			

理由
■病気･けが(風邪、熱、体調不良)
□不登校
①学校生活上の影響　④不安などの情緒的混乱
②あそび･非行　⑤意図的な拒否
③無気力　⑥複合(　　)
□経済的理由により保護者が登校させない。
□その他
･保護者に登校させる意思がない等

学校との連携
※保護者から学校(担任)に連絡があった。
□ 保護者から連絡帳等で欠席の連絡があった。
■ 保護者から電話で欠席の連絡があった。
※担任から家庭に連絡した。
■ 担任が電話で保護者に欠席の理由を聞いた。
□ 担任が家庭訪問をして、保護者と話をした。
□ 担任が家庭訪問をして、本人とかかわった。
※保護者との連絡
■ ほぼ取れる　□ 取れたり取れなかったり
□ ほとんど取れない　□ 拒否
(保護者の様子)
子どものいいなりになることがある。
仕事が忙しいらしい。
※担任以外の教師が本人とかかわった。
■ 養護教諭　□ 児童支援担当
□ 管理職　□ その他(　　)
※スクールカウンセラーに相談した。
□ 本人　□ 保護者
※登校時の授業への参加状況
□ 参加しない(活動場所　　)
□ 参加したりしなかったり
(参加しないときの活動場所　　)
□ ほぼ参加している

担任からの聴き取り
ちょっとのことで体調の不良を訴える。
遅刻が多い。
休日明けの欠席が多い。
算数が苦手。(数学的な思考が難しい)
友だちがいないわけではないが、本音がいえる友だちがいるとは思えない。

児童の様態
※登校に対する本人の意識
□大変強い　□強い
■弱い　□大変弱い
※非行の傾向
□異装　□茶髪　□喫煙
□飲酒　□家出　□恐喝
□暴力行為　□その他
□深夜徘徊　(　　)
※学習の様子
□積極的に参加する
■あまり積極的とはいえない
□学業不振
※登校に対する保護者の意識
□大変強い　■強い
□弱い　□大変弱い
■保健室に頻繁に来室する
□過去にいじめられた経験がある
□過去にいじめ側の経験がある
□虐待の可能性がある
□家庭生活に急激な変化があった
(　　)
□親子関係にトラブルがある

Q-Uのプロットの位置
□学級生活満足群　■非承認群
□被侵害行為認知群　□学級生活不満足群
□実施できていない

本人の性格
□まじめである
□周りの刺激に敏感である
■孤立感がある
□活発
□内向的性格である
□緊張しやすい
■自己中心性がある
■ストレスに対して逃避的である
□幼稚さがある
□楽観的である
□几帳面なところがある
□その他、顕著な面
(　　)

※『教師のための不登校サポートマニュアル』(小林正幸／小野昌彦著 明治図書 2006)より、
小林正幸教授「熊谷市不登校児童・生徒用個別支援票」を参考に作成

図３　　個別支援票（記入例）

②　個別支援シートの活用

個別支援シートを活用するにあたり、回覧の途中でシートを回収し、研究資料とした。そのため、回覧のサイクルの目安を一カ月にした。

具体的には、前月末までに各担当がそれぞれコメントを書き､管理職を経由する｡第１週目、児童支援担当がシートを集める。第２週目、私がシートを回収し、コメントを書いて各担任に返す。第３、４週目、各担当がそれぞれコメントを書き、管理職を経由するようにした。

個別支援シートで見られる児童の変容が著し

かったＢ児は、家庭の環境は厳しいが、家庭訪問や電話連絡、ＴＴの学習面での支援など、学校での丁寧なかかわりのもと、６月、11 月に実施したＱ−Ｕでは共に学級生活満足群にプロットされている。個別支援シートの担任、児童支援担当、養護教諭、学校カウンセラーの記述からもその変容が見える。表１は個別支援シートの実際の記述から児童の様態のみを抜粋したものである。

表１　Ｂ児の個別支援シートに見られる児童の変化

４月・５月	６月・７月	９月	10 月・11 月
４月、耳下腺炎による出席停止と、喘息による欠席が続いた。毎日 9:00 過ぎて登校。	遅刻が減ってきた。夏休み、加力指導で学校に呼んだが、一度も来ない。声をかけると本人は特にしゃべらなくてもニコニコしている。 ※Ｑ−Ｕの実施 （学級生活満足群）	７月に比べ、遅刻は増えたが、欠席はなし。休まずがんばって登校している。学習用具も少しずつそろい始め、だいぶ、学校生活が戻ってきたようだ。赤鉛筆、消しゴム等、大事に使っている様子。靴や上履きが新しくなっている。体力的には弱く、喘息の発作を何度かおこす。保健室での会話の中に登校している楽しさがうかがえる。	運動会の疲れからか、遅刻が目立ってきた。しかし、欠席はなし。喘息の発作が時々あり、朝遅れる原因にもなっている。学校では毎日遅くまで残って宿題をして帰る。 ※Ｑ−Ｕの実施 （学級生活満足群）

③　支援会議（チェーントーク）

支援会議こそ情報を共有でき、役割分担を明確にし、支援の方向性を決定する場である。また、回を重ねることで連絡、報告が密になってくる。そうなると、チームが組みやすくなり、メンバーの間に信頼関係ができる。時間を有効に使い、多忙感の中でも有意義な支援会議をするために、エンカウンターの要素を取り入れた話し合いを「チェーントーク」として取り組んだ。エンカウンターの要素を取り入れたのは人間関係の促進につながると考えたからである。「チェーントーク」とは、前の人が発言した話の内容にリンクさせて次の人が自分の意見を述べていき、くさりのように少しずつ話がつながっていくことをねらっている。また、話題が拡散することを防ぎ、短時間（30 分）で効率よく会議を進めることができると考えた。

ア　５年学年団の支援会議をふりかえって

チェーントークの意味合いを共有し、前の人の発言に絡めて自分の意見を述べていった。輪投げの「輪」を使い、発言する人がまわしていくようにしたが、授業の全員発言のような雰囲気になってしまい、自由な発言ができにくい感じを受けた。しかし、会議への全員参加ができ、話題が拡散せず、支援の方向性が決定されていった。会議の雰囲気としては、意見を言いたくなった人に「どうぞ」と輪を渡していくという具合に、自然な流れで会が進んでいくのが望ましい。図４はこの支援会議の記録である。

イ　６年学年団の支援会議をふりかえって

児童の家庭環境、育ってきた背景、その中で抱えている寂しさや辛さ、やりきれな

図４　チェーントーク記録

い気持ちを担任は痛いほど知っている。母親が、父親が、と家庭に原因があるとして、母親や父親に変化を求めても学校がその人を変えることは大変困難である。しかし、支援会議で、何ともし難いその担任の思いをみんなが共感し、その担任を支えていく学年やその他の担当のつながりが感じられた。30 分では終わらない支援会議になったが、じっくりと話しあう土壌があった。最終的には「今、学校で何ができるか」という支援の方向性に話が進み、その児童にそれぞれの立場でどうかかわるかというところに落ち着き、対応が明確になった。

4　結果と考察

(1)　児童の変容より

A児は、昨年度から遅刻が多く、学校での表情も乏しかった児童で、家庭的な背景も厳しい状況にある。そこで、個別支援シートを用いた支援を継続した。担任、児童支援担当、養護教諭、学校カウンセラーがそれぞれかかわったケースである。A児は６月のQ-Uでは学級生活不満足群にプロットされていた。その後、学級での対応に加え、チームでのかかわりを継続した結果、11 月のQ-Uでは、プロットの位置が学級生活満足群に変化した。（実態調査の③参照）これは、担任を中心にしたチームでのかかわりが功を奏したといえるであろう。表２は個別支援シートの実際の記述から児童の様態のみを抜粋したものである。

表２　A児の個別支援シートに見られる児童の変化

４月・５月	６月・７月	９月	10 月・11 月
遅刻が多い。４月当初は表情が硬かったが、楽しい活動をするときには自然な笑顔が見られるときもある。児童支援担当とのかかわりの中で、家のことなどを少しずつ話すようになる。	６月は遅刻が多かった。７月はがんばって約束（８時 15 分に児童支援担当と校門で待ち合わせ）を守っていた。朝は児童支援担当が迎えにいくことが多いが、玄関のチャイムで気持ちの切り替えができるようである。 ※Q-Uの実施 （学級生活不満足群）	２学期になり、笑顔で話す場面が多くなった。９月当初は、がんばりすぎているように思われ、中旬、遅刻が多くなった。学校生活は楽しいようである。	授業中は発表もよくしている。友だち関係も良好のように思われる。昼休みには、担任や友だちと土佐弁カルタなどをして楽しんでいる。登校は遅くなっても一人で来ようとしている。時々気持ちの切り替えはできているのか心配な様子も見られた。 ※Q-Uの実施 （学級生活満足群）

C児は、学年当初欠席の状態が気になり、個別支援シートを用いて支援を始めたが、学校生活上、個別の支援の必要性はないだろうと判断したケースである。この場合、欠席の状況が気になった時点で早期の対応がされたため、問題の拡大にはいたらなかったと考えることができる。表３は個別支援シートの実際の記述から児童の様態のみを抜粋したものである。

表３　C児の個別支援シートに見られる児童の変化

４月・５月	６月・７月	９月	10 月・11 月
５月欠席４日（風邪、熱等）。毎朝学校へは母親が車で連れてくる。今のところ不登校の様子は見られない。保健室へ体調不良を訴え、来室。	連続欠席もなく元気に登校している。自分の失敗に弱い。注意をすると、ますます気にしてできない。 ※Q-Uの実施 （非承認群）	個別支援シートからはずし、経過観察。	経過観察の継続。 ※Q-Uの実施 （学級生活満足群）

また、別室登校をしている児童については、通常、児童が教室に不在のため、担任は学校でのそ

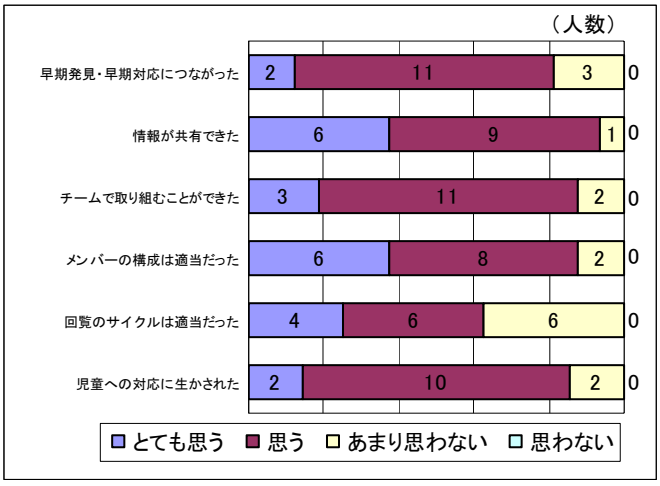
の児童の様子が分かりにくい。別室で児童に対応している教員が、担任と密に連絡や報告を行っている。しかし、担任が児童とコンタクトを取ろうとしても、学校行事を控えたり、多忙を極めていたりする時には、顔を合わすこともままならない。そのような時には、個別支援シートに記入された児童の様子や他の教職員のかかわりなどから、その時の、児童の姿を想像することができた。これは、個別支援シートが別室登校をしている児童と担任をつなぐツールになったといえ、情報の共有に役立った一例である。表４は個別支援シートの実際の記述から児童の様態のみを抜粋したものである。

表４　Ｄ児の個別支援シートに見られる様子

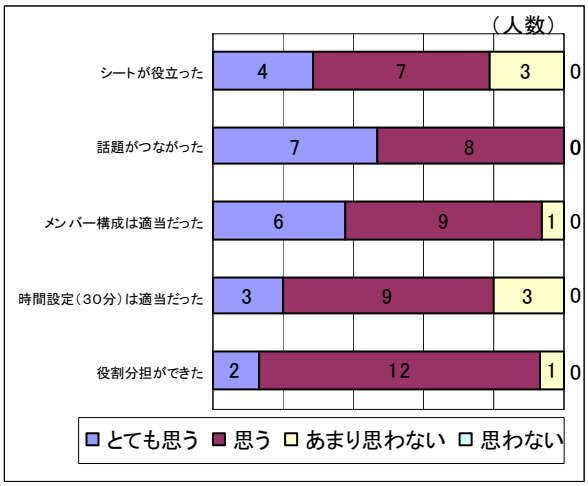
11/９（児童支援） 遠足。バスに乗る前お金を出して緊張。昼食はみんなとは別の場所で、おやつはみんなのところへ少しずつ寄っていく･･･	11/13（児童支援） 朝、電話があり、･･･	11/15（担任） 今日も笑顔が見られた。心に余裕があるのか、･･･避けるようなこともなかった。	11/28（担任） ○○先生とお好み焼きを作った。一枚いただいた。	11/30（養護教諭） 11 月は欠席０。よくやったね。･･･12 月もこの笑顔が増えるといいな。

(2)　教職員の意見･感想より

管理職、対象学年の担任、ＴＴ、児童支援担当、養護教諭、教員補助員、学校カウンセラーを対象にアンケートを実施した。内容は個別支援シートと支援会議の２項目に分けて作成した。４段階評価で、最後に自由記述で意見・感想を聞いた。グラフ１、グラフ２は個別支援シートを用いた連携に関するアンケート結果を項目別に集計したものである。



グラフ１　個別支援シートについて



グラフ２　支援会議について

アンケートの回答から分析すると、個別支援シートは、主に情報が共有され、その情報が児童への対応に生かされたといえる。しかし、回覧のサイクルの期間は学校の実情に合わなかった。回覧のサイクルが長く早期発見からチームでの早期対応に生かされにくいことが分かった。また、学校では突発的な問題も多く、個別支援シートが支援会議に必ずしも生かされるとはいえないことも分かった。しかし、支援を継続することでシートの記述が記録として残り、児童の変容を確認できることは支援会議の時に役立つ。

支援会議は、自分がかかわれることについて考えたことから、会議の流れの中で担当や立場に合わせた役割分担ができ、児童への対応に生かされたといえる。しかし、ケースによっては、30 分の時間設定の中で問題の焦点化から支援の方向性の決定まで行うには無理があるものもあった。チェーントークは話題のつながりに役立ち、話題が拡散するのを防ぐことができた。

表５は、教職員のアンケートの自由記述に見られたキーワードを手がかりに、４つの内容に分類したものである。個別支援シートに児童への気づきやかかわりを記入するとき、対象の児童を意識

し、記述や支援会議で、他の教職員から具体的な支援策等を学び、自らの支援へと生かすことができたことが分かった。また、担任の思いを知り、共感できることもあり、担任を支えるという意味でも有意義であった。

表５　アンケートの自由記述に見られた教職員の意識

内容	キーワード	個別支援シート（16 人中）	支援会議（17 人中）
①情報の共有	情報の共有、知る･知らせる、支援の把握、知り合う　など	６人 (37.5%)	７人 (41.2%)
②役割分担	役割分担、多方面から、それぞれの立場、指導者に合ったかかわり、など	２人 (12.5%)	10 人 (58.8%)
③気づき	気づく、学ぶ、意義がある、意識付け、支援のあり方を見つめなおす、など	７人 (43.8%)	６人 (35.3%)
④行動化	手立て、自分にできること、支援の仕方を工夫、生かす、具体的な対応、など	５人 (31.3%)	９人 (52.9%)

（　）内はアンケートの自由記述の中に、①～④の意識と捉えられるキーワードを記した教職員の全体に占める割合

このような取組に対して､時間の確保が困難なことや､さらなる多忙感を招くという意見もあり、児童と直面している先生方の負担感が伺える。しかし、その中でも児童に必要な支援との認識も強く、多忙な中でも、シートを回覧する上で支援会議を継続することが、チーム支援により効果が生まれ、校内の連携につながった。ひいては、不登校が心配される児童について、現時点で可能なかかわりができるという点において、不登校を未然に防ぐことができるチーム支援の一方法となったといえよう。

５　校内のチーム支援

個別支援シートを有効利用し、支援会議を継続するために、多忙な学校において効果があるだろうと考えられるチーム支援の流れを提案する。学校における児童への予防的な支援を大きく３段階に分けると図５のようになる。

第一次対応は、気がかりな点が見えた時点で早期に対応することで問題を最小限にとどめることを目的とする。それでも様態が改善されない場合は、第二次対応として、個別支援シートで情報交換をしながらチーム支援を継続する。その中で、別室登校や不登校となるなど、さらに対応を要すると判断される場合は第三次対応として、校内事例検討会の対象となったり関係機関との連携の必要性も考えたりするケースも出てこよう。

第二次対応として、個別に支援が必要な児童であるかどうかの判断は担任、児童支援、養護教諭など複数で情報を交換しながら決定する。この時、個別支援票（図３）を用いて話し合いをすれば必要な情報の共有ができる。決定されると、個別支援シートを用いて支援を継続しな

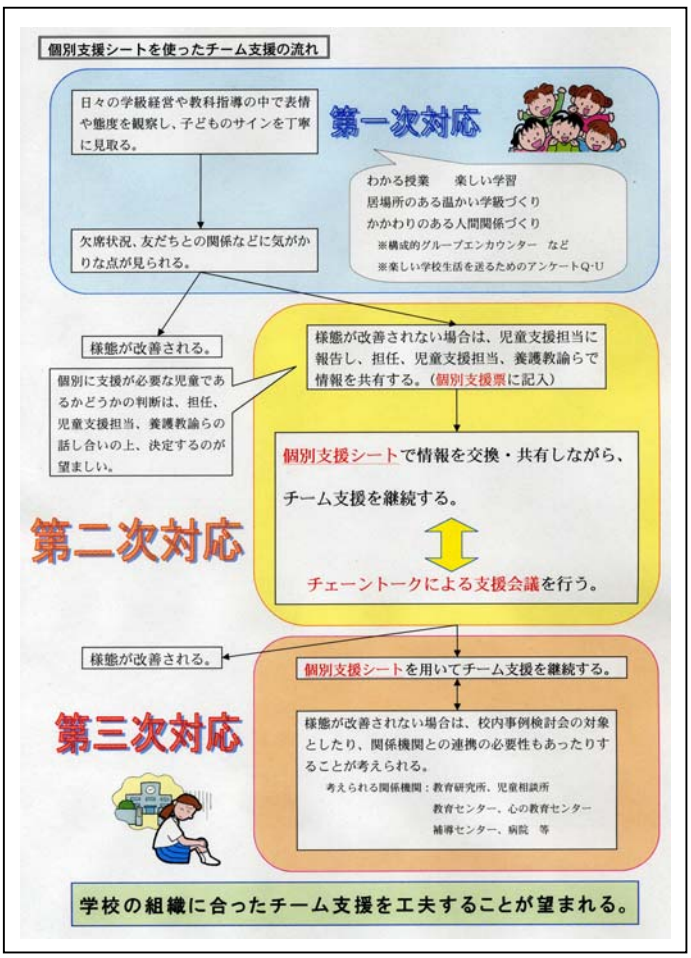


図５　　支援の流れ（一例）

がら、適時、支援会議を行う。これをくり返すことで校内のチーム支援となる。但し、学校の実情により、配置される教員の数や校務分掌の違いなどがあり、組織に合ったチーム支援を工夫することが望まれる。

6　成果と課題

(1)　成果

①　個別支援シートを、伝えるべき情報として回覧した点で、多忙な学校においても情報の共有ができ、児童への対応に生かされた。

②　支援会議では､多方面から具体的な支援策を考える場になり､支援の方向性を明らかにできた。また、チェーントークは、話題を拡散させずに短時間で支援の方向性を導くのに役立った。

③　個別支援シートを回覧し、支援会議を行うことで、支援の対象児童の存在を意識でき、チーム支援の理解が深まるとともにさらなる意識の高まりが見られた。

④　校内のチーム支援として、学校における児童への予防的な支援の流れを３段階に分けて判断し、第二次対応として個別支援シートを用いたチーム支援を提案することができた。

(2)　課題

①　個別支援シートは、早期発見からチームでの対応までに時差があることから、回覧のサイクルを一律に決めず、学校や学級の実情に合わせて柔軟に活用すると児童への対応に生かされる。

②　欠席日数だけでなく遅刻や早退、不定愁訴等、登校しながらも支援を求めている児童のために個別支援シートが有効活用されると、さらに不登校の予防に効果的であると考える。

③　個別支援シートに名前を挙げるかどうかの判断を適切に行うことで、充実した校内チーム支援ができると考える。

④　個別支援シートを回覧する上で、個人情報の厳重な管理の工夫が求められる。

7　おわりに

連携の必要性をよく耳にする。組織があり、情報を共有する場や役割分担をする場ができる。そして、児童への対応に生かされて初めて連携できたと言えるであろう。本研究においては個別支援シートを用いて情報の共有ができ、支援会議において、児童への支援の方向性を明らかにすることができた。「支援会議の中で、担任として困っていることを率直に話せ、精神的に楽になった。」という感想もあった。機械的な役割分担ではなく、他のメンバーの考えや動きを知り、自分ができることを考えることでつながりができる。日ごろから、困っていることや悩みを本音で話せる集団こそチームの土台であり、そこには信頼関係が生まれていることは言うまでもない。

今後は、個別支援シートを、学校におけるそれぞれの担当の役割をつなげ、コーディネートできるものとして、柔軟な活用を考慮しながら役立てていきたい。

【引用・参考文献及び資料】

１）文部科学省（2007）「平成 17 年度　児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

２）小林正幸　（2005）『教師のための不登校サポートマニュアル』明治図書

３）小林正幸　（2003）『不登校児の理解と援助』金剛出版

４）石隈利紀　（1999）『学校心理学』誠信書房

５）高知市立新堀小学校　武田須磨（2007）
『学級集団を支えるチーム支援のあり方－不登校の予防を中心として－』

６）新村　出　（1998）『広辞苑　第五版』岩波書店

７）國分康孝　（2001）『エンカウンターで学校を創る』図書文化

８）河村茂雄　（2006）『学級作りのためのＱ－Ｕ入門』図書文化